

滋賀森林インストラクター会

会報・第23号

2018年12月30日



アオモジの黄葉と花芽(2018.12.18. 木津川市 浄瑠璃寺門前)

目次

1. 緑の少年団指導者研修会	下川 茂	2～3 頁
2. 2017 年度定例研修を総括して	小西 民人	3～5 頁
3. 全国植樹祭に向けて	佐々木 建雄	5～6 頁
4. 東京大学附属小石川植物園を訪ねて	高橋 優	7～8 頁
5. 会員の著書の紹介	事務局	9 頁

～緑の少年団指導者研修会～

今年度も滋賀県緑化推進会からの委託事業「緑の少年団指導者研修会」が実施されました。本年度は「森の危険生物」というテーマに絞り、樹木観察もウルシ類など森の中で触れてはいけない樹木に焦点を当てた観察にしています。研修会場で植生が異なり、説明したい危険生物やウルシなどが見つからない場合があります、講師の皆さんがそれぞれ工夫して対応していただきました。

番狂わせとしては、第2回研修会の会場を予定していた「きゃんせの森」では竜巻による倒木被害が甚大で使用できなくなり研修会が中止になりました。その結果、昨年より1回少ない計6回の「緑の少年団指導者研修会」の開催となりました。講師として参加した滋賀会会員は下表のとおりです。

その中から、「ビラデスト今津」で開催した研修会を下川さんに報告していただきました。(事務局)

開催日	開催場所	滋賀会講師
7月29日(日)	西部南部地区：びわこ地球市民の森	佐々木建雄、高橋優
8月8日(水)	湖北地区：きゃんせの森 (6/29に発生した竜巻の被害で研修会中止)	
8月21日(火)	高島地区：ビラデスト今津	梶谷栄治、下川茂、佐々木建雄
8月22日(水)	湖北地区：高山キャンプ場	下川茂、小西民人 平田明、中川仁男
8月24日(金)	中部地区：高取山ふれあい公園	小西民人、高橋優
8月28日(火)	甲賀地区：みなくちこどもの森	水田由香氏、小西民人、高橋優
9月9日(日)	中部地区：河辺いきものの森	関澤友規子、水田有夏志 小西民人、高橋優

「ビラデスト今津」研修会 (8月21日)

下川 茂

平成26年度から始まりました滋賀県緑化推進会の委託事業も早5年目を迎え、本年度も7月～9月にかけて、緑の少年団リーダーを対象とした全6回の「指導者研修会」が実施されました。その内の標高約550mの山上にある自然環境に恵まれた「ビラデスト今津」を舞台として開催した研修会～「森の危険生物」をテーマに①講義と②自然観察の二部形式で半日間～の研修を紹介します。

まず、第1部の講義では、導入段階で配布した「危険生物」の資料に基づき、(1)危険の回避、(2)遭遇時の回避方法を説明後に、①危険な動物(マムシとヤマカガシ、スズメバチの仲間、ヤマビル、ムカデ、マダニ、ドクガ)の特徴やその形態、被害時の症状や応急処置方法と予防方法等について具体的な資料を使ってわかりやすく説明しました。

次に、危険な植物(ウルシ科の仲間のヤマウルシ、ハゼノキ、ツタウルシ、ヌルデ等)についても、その形態や症状、対応の仕方を実物資料を提示して詳細に解説しました。なお、「ポイズンリムーバー」の使用法、参考図書「危険生物」(文一総合出版)についてもふれました。

第2部では実際にフィールドに出て、ヤマウルシ、ヌルデ、ツタウルシ、キタヤマブシ等の危険生物の実物を前にして、その特徴や生態ついて解説しました。また、観察ルートを一緒に歩きながら、環境省絶滅危惧II類の「デンジソウ」やシカ不嗜好性植物の「イワヒメワラビ」等についても観察しました。研修終了後の受講生からは、身近な危険生物について知らなかったことが多くあり、今回の研修を通して学んだ事柄を持ち帰って、今後の緑の少年団の活動に活かしたいという意見が多数ありました。



～2018年度の定例研修会を総括して～

研修担当 小西 民人

今年度は次のように4回の研修会を実施しました。敬称略です。

①7月22日(日) 高島市・ビラDEST今津周辺 (報告者; 下川)

参加者8名(佐々木、梶谷、下川、高橋、平田、水田、野村、小西) 見送; 清水

下見7月1日(日) 参加者(梶谷、関澤、小西)



デンジソウ (シダ)



タンカイザリガニ



ツノハシバミ果実

②8月12日(日) 東近江市・河辺いきものの森(報告者;橋木)

参加者5名(高橋、下川、橋木、関澤、小西)



ハイハマボス



アゲハモドキ(蛾)



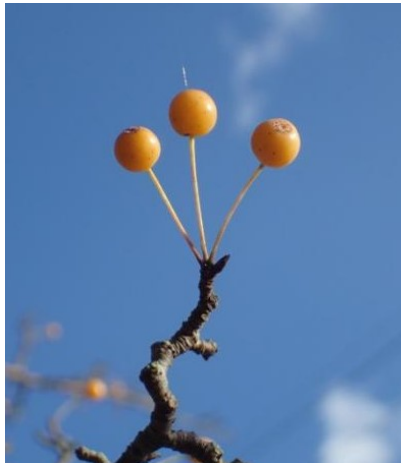
ケヤキ樹皮

③10月28日(日) 多賀町・高取山(報告者;小西)

参加者7名(高橋、平田夫妻、高田、関澤、小西、フォレストワーカー馬場)



ミヤマガマズミ



キミズミ



ネズミサシの合着前の果鱗

④12月9日(日) 甲賀市・みなくち子どもの森(報告者;高橋)

参加者6名(高橋、水田、高田、関澤、小西、フォレストワーカー馬場)



アカホシテントウ蛹殻



ツガの球果



マテバシイの雌雄の花序

今年度の定例研修会は、役員会で話し合い、年間7回ほど受託実施している緑の少年団指導者研修会の研修会場をより深く知ることを目的に実施することにしました。7箇所ある会場から、ビラデスト今津、きゃんせの森、高取山、みなくち子どもの森の4箇所を選定。1回目はビラデスト今津にし、梶谷さん担当。2回目はきゃんせの森で下川さん担当。3回目は高取山で小西担当。4回目はみなくち子どもの森で高橋さん担当。このように推進担当を持ち回りにして実施する企画は担当者の意欲を高める点でよかったように思います。ただ、担当者が役員だけでしたので、役員以外にも広げられるようにするとさらによかったなあと反省しています。今後の課題です。

計画は以上のように立てたのですが、実際は6月29日に起こった米原での竜巻（風速65m超）で、会場のきゃんせの森に倒木による大被害が出て、2回目の会場を河辺いきものの森に変更したり、3回目の高取山での研修会が近江八幡緑の少年団個別指導の日程と重なり、実施日を1週間遅らせるなど、いくつかの変更点が生じました。変更しながらも4回きちっと実施できたことはよかったと思います。

それぞれの回の詳細は報告書の内容を精査してください。

今年度の研修会を総括すると、ここ数年同じなのですが、参加者が少なく、また、ほぼ同じ人だけが参加している状況で、あまり変わりばえしません。その中で、日頃林業に携わり、木の伐採などをしておられるフォレストワーカーの馬場さんが3、4回に参加。馬場さんにとっても研修になるでしょうが、我々にとっても大変貴重な生きた知見が得られるよい機会となりました。今後も会員以外にも広く門戸を開き、相互研修ができる研修会に発展できれば定例研修会の意義も高まると期待します。会員の皆さんの様々なご意見・ご提案・ご協力をよろしくお願いします。

全国植樹祭に向けて

佐々木 建雄

第72回全国植樹祭が2021年の春、滋賀県甲賀市・鹿深の森で開催されることになりました。

全国植樹祭は、豊かな国土の基盤である森林・緑に対する国民的理解を深めるために、公益社団法人国土緑化推進機構と都道府県の共催により開催する国土緑化運動の中心的行事である、と定められています。

その第1回目は、1950年（昭和25年）に山梨県甲府市で開催され、以来、各都道府県において毎年春季に開催されています。

滋賀県においては、第26回全国植樹祭が、1975年（昭和50年）5月25日に栗東町金勝山で開催されて以来、今回が2回目の開催となります。

さて、11月のとある日、県庁の森林政策課から電話が入りました。

全国植樹祭の「大会テーマ」と「シンボルマーク」を決めるにあたって、全国公募をするので、集まった作品の最優秀賞、優秀賞を選出する委員になって欲しい、というものでした。少し迷いながらも、森林インストラクターとしては積極的に協力すべき、との思いから引き受けることにしました。

委員になって最初の仕事は、公募で集まった1730点の作品から、委員一人当たり10点を選ぶことでした（委員は6名）。事務局から送付されてきた分厚い資料を見た時点で、気の遠くなる

思いがしましたが、一旦引き受けたからには後へは引けず、作品1点ずつ目を通すという根気のいる作業に入りました。

植樹祭の理念にかなったものであるか、広く一般に理解しやすい内容表現であるか、未来志向であるか……など、自分なりのチェック項目を設け、それに沿ったものに絞り込むという手法で作業を進め、やっとの思いで10点を選ぶことができました。

この10点を各委員が持ち寄り、合議制でさらに絞り込み、最優秀賞候補1点、優秀賞候補3点を選びました。後は、三日月知事が委員長を務める実行委員会に決定を委ねることとなります。

さらに、これから「シンボルマーク」の一般公募が行なわれ、入賞作品の審査という仕事が待っています。

先日、昭和50年開催の全国植樹祭会場となった、金勝の県民の森（現在は日産リーフの森）に行って、天皇、皇后両陛下お手植えの木を見てきました。

天皇お手植えのヒノキ、皇后お手植えのイロハモミジ共に立派に育っています。

ヒノキの幹回りは実測135cm、樹高は目測約25mといったところでした。

その後ろには、昭和天皇の御製である…

金勝山 森の広場にあれかしと いのりはふかし ひのきうえつつ

の歌碑が立っていました。

第72回は、昭和から平成を経て、新元号になってからの植樹祭となります。

県民こぞって気運を盛り上げ、新しい天皇、皇后両陛下をお迎えしたいものです。



天皇お手植えのヒノキ



左：天皇お手植え

右：皇后お手植え

東京大学付属小石川植物園を訪ねて

高橋 優

12月の初旬、東京に行く用事があり、一度は行ってみたかった「小石川植物園」を訪ねました。江戸幕府が1684年に設けた「小石川薬園」に源を発する日本で最も歴史の古い植物園です。日本の近代植物学の発祥の地でもあり、植物学研究史を物語るまさに記念碑的な樹木が保存されています。国内の植物だけでなく、世界中の植物を収集・栽培されています。珍しい植物の開花がニュースになることもあり、私はそんなニュースでこの植物園を知りました。山手線内の文京区にあり、東京駅から地下鉄に乗り継ぎ30分ほどで行くことができます。どんよりとした曇り空で、時々小雨のばらつく水曜日の午前でしたが、訪れる人が多く、小学生の自然観察授業も行われていました。

ほんの一部ですが、「小石川植物園」の様子を写真で紹介します。



小石川植物園正門



本館



本館前のヒマラヤスギ



カエデ並木



ソメイヨシノ林... 花の時期は見事ででしょうね



精子発見の大イチョウ

明治 29 (1896) 年に、理学部植物学教室の助手であった平瀬作五郎が、イチョウに精子が存在することを発見した大イチョウ。これは日本の近代初期の生物学者による世界的な発見で、生物学史上の偉業とされています。この樹は樹齢約 300 歳、幹周 4.9m の大木です。



園内を駆けずり回る子供たち。ほんとは自然観察だけど...



ケヤキ



シロマツ



タラヨウ



ムクノキ



ヘツカニガキ

最後に、樹肌の面白かった幹のスナップです。こんなケヤキやムクノキは初めて。タラヨウは顔。松の樹肌とは思えない中国原産のシロマツ。彫の深い網目模様のヘツカニガキ、アカネ科だそうです。

水田有夏志著「トチノキ巨木の森を守る」

一 会員の著書紹介

事務局

巨木の魅力はこの世のものとは思えないような異形(いぎょう)にあると思います。巨大な幹は変形し、傾いで、洞を穿ち、樹肌は苔むし、樹皮が捲れ、太い枝がところどころ折れながらも周りを支配しようと伸びている。そんな姿が私たちと同類の生き物であること超越して、対峙する人に永く過酷な年月をずしりと感じさせてくれます。会員の水田さんが今年 11 月に出版されたこの本で紹介している栃の巨木たちもその異形な姿に圧倒されます。



水田さんの視点は湖国の最北端、高時川源流域のトチノキ巨木の発見や紹介に留まらず、伐採の危機を避けるため森林所有者や地域住民を巻き込んだ巨木林の保全活動、さらにトチノキや森と関わる暮らしや文化にまで及んでいます。栃の実の餅づくり、イタヤカエデを薄切りにした材料で作る小原簗、シナノキの繊維を使った縄づくりなど森の生活に密着した文化が紹介されています。

栃の巨木を調べていたさなか、水田さんは滋賀県の自然環境保全課長に就任し、トチノキ巨木林保全活動を担当することになりました。そこから、行政側からの保全活動推進の経緯が語られています。地元の生産森林組合や地域ボランティア、関係行政機関や団体など広く巨木林保全に向けて協力を依頼した活動や、将来の保全恒久化に向けての見通しなど担当者ならではの情報です。

保全活動の中心担当者として元滋賀会会員の今城克啓さん、協力者として会員の中川仁男さんも登場しており、少しうれしくなりました。

*購入希望の方は水田さんへ直接申し込みください。TEL : 090-5662-2694 Mail : k1m0r1mizu@nike.conet.ne.jp

編集後記

会報第 23 号（2018 年度下半期号）をお届けします。年末ぎりぎりの発行ですが、今年の 21 号より 1 日早く完成しました。これで、大みそかに年賀状を書くことができます。

今号では、滋賀会の活動下期の主要な活動、県主催の「山を活かす、山を守る、山に暮らす交流会 2018」や「大砂川の森」整備活動など記事にしましたが、滋賀会ホームページに活動報告がされているのでご覧ください。

今回、編集の準備不足で、少数の方にしか記事を書いていただけませんでした。次号では広く会員の方に原稿を募集しますので、多く方に参加していただけたらと思います。よろしくお願いします。

では、よい年をお迎えください。

（高橋）